

X-14 K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点 8b 層出土III群土器群の構成とその位置づけ

高倉 純（北海道大学）

a. はじめに

K39 遺跡工学部共用実験研究棟地点の 8b 層からは、北大式土器に帰属すると考えられる土器群がまとまって出土した。北大式土器に関しては、最初の提唱（河野 1959）以後、松下亘（1963）や斎藤傑（1967）らによって細別指標の抽出がはかられてきたのは、周知の通りである。近年では、いくつかの注目すべき論考のなかで（鈴木 2003, 鈴木他 2007, 榊田 2009 など）、北大 I 式・II 式・III 式と設定されてきた従来の細別型式の妥当性が問題とされ、当該期の土器から有意な時間的単位をどのように抽出するのかが議論されている。また、後北 C₂-D 式土器から擦文式土器へという時間的に縦に配置される土器の相互に伏在する系統関係だけでなく、同時期の周辺地域に展開していたオホーツク式土器あるいは東北地方の土師器との横の影響（系統）関係についても考慮すべきことが具体的に指摘されるようになってきている。

こうした研究の現状のなかで、器形や文様に一定のバリエーションが認められる本地点 8b 層出土III群土器群の検討は、どのような意義をもちうるであろうか。少なくとも現状では、従来的な定義（例えば斎藤らのいう「北大 I」「北大 II」「北大 III」）にもとづいて土器のまとまりを摘出するだけでは、本土器群の位置づけを明らかにしたとはいえないことになる。

第一に、本土器群では、まとまった個体数の土器が出土しているので、その構成を定量的にどう評価するのか、という点について検討が深められるである。第二に、本土器群では、ある程度全体の器形が復元できる個体がまとまって出土しているので、器形や文様に認められるさまざまな特徴が、どのように相関して一個体に現れているのかが検討できる。これまでの北大式土器の研究では、特定の文様要素だけが細別指標として注目されてきた一方で、他のさまざまな要素とその相互関係については、充分な検討がなされてはこなかった傾向がある。上述のような検討は、こうした問題の検討に対して基礎的なデータを提供することになろう。第三に、本土器群には、これまで北海道の北大式土器が出土した遺跡では確認さ

れてこなかった特徴をもつ土器が含まれている。それらのなかでも、とくに東北地方からの影響（系統）関係を強く示唆する資料について、対比資料の吟味もふまえながら言及をおこなっていきたい。

本節では、8b 層の土坑覆土からの出土資料および遺構外の包含層出土資料を資料体として、以上の問題に関して検討を進めていくこととする。

b. 土器群の構成

個体数にもとづいた器種組成の集計をおこなうために、8b 層から出土した個体番号が付されている接合・復元資料および口縁部資料を対象として、器種判別をおこなった。なお、北大期には属さない I 群および II 群の土器資料については、事前に集計対象から除外している。

集計された器種組成を表 128 に示した。本土器群では圧倒的に深鉢が多いが、壺や片口なども一定数組成されていることが確認された。北大期における土器の器種組成が定量的に把握されることはこれまでほとんどなかつたが、炉址など各種の遺構が見つかっている他の遺跡では、ほぼ同様の傾向が認められるのではないかと思われる。

次に、深鉢・壺に設定された類型の組成を、個体数にもとづいて定量的に明らかにしたい。おおよそ口縁部から胴部までは復元されており、器形や文様の全体的特徴が把握できるものを、8b 層の土坑出土資料および遺構外出土資料から抽出し、分類を試みた。口縁部の破片資料であれば、さらに多くの資料抽出が可能であるが、頸部から胴部にかけての器形と文様の変異の理解が北大式土器の研究にとってより重要な意味をもつため、そうした部位が観察できない資料については除外した。抽出した資料は、図 61～64・78～90 にすべて図示されている。

第 III 章で記述した分類基準にもとづき、深鉢と壺の類型の組成を集計した結果を、それぞれ表 129・130 に示す。この集計結果からは、第一に、深鉢では、頸部に屈曲をもたないものが主体をしめ、屈曲をもつものは 4 個体に限られていたことがわかる。第二に、文様としては、口縁部に突瘤文と微隆起線文の両者が認められるもの、突瘤文のみが認められるもの、そして無文のものが多く見出された。突瘤文のみが認められるものや無文のものが、これだけまとめて確認されたことは珍しい。第三に、深鉢で、頸部に明瞭な屈曲をもつもの（c 類と d 類）は、器形・文様とともにバリエーションにとぼしい。いずれも口径が胴径よりも大きく（d-8 類のみ存在する）、口縁部には突瘤文のみが認められ、他の文様は認められない。第四に、頸部に屈曲がない深鉢で、口縁部に微隆起線文

表 128 西区 8 b 層出土土器群の器種組成

器種	個体数	%
深鉢	127	77.0
小型深鉢	4	2.4
鉢	3	1.8
壺	11	6.7
片口	14	8.5
注口	5	3.0
壺	1	0.6
総計	165	100.0

表 129 西区 8 b 層出土深鉢の類型の組成

類型	個体数	%
a-1	3	7.9
a-2	1	2.6
a-3	0	0.0
a-4	0	0.0
a-5	0	0.0
a-6	1	2.6
a-7	0	0.0
a-8	5	13.2
a-9	4	10.5
b-1	3	7.9
b-2	1	2.6
b-3	1	2.6
b-4	0	0.0
b-5	3	7.9
b-6	0	0.0
b-7	1	2.6
b-8	8	21.1
b-9	3	7.9
c-1	0	0.0
c-2	0	0.0
c-3	0	0.0
c-4	0	0.0
c-5	0	0.0
c-6	0	0.0
c-7	0	0.0
c-8	0	0.0
c-9	0	0.0
d-1	0	0.0
d-2	0	0.0
d-3	0	0.0
d-4	0	0.0
d-5	0	0.0
d-6	0	0.0
d-7	0	0.0
d-8	4	10.5
d-9	0	0.0

をもつもの(1~3類), 突瘤文のみが認められるもの(8類), 無文のもの(9類)は, 器形が口径≤胴径(a類)と口径>胴径(b類)のいずれの場合にも認められた。第五に, 頸部に屈曲がない深鉢で, 口縁部から頸部にかけて沈線文や縄文が認められるものは器形が口径>胴径(b類)に, 胴部に縄文が認められるものは口径≤胴径(a類)にのみ見出された。第六に, 壺では, 体部が無段のもの, 沈線が認められるものの両者が認められた。

c. 土器の属性間の関係

本土器群には, 全体的な器形やそのなかでの文様の配置について観察可能な個体が数多く含まれている。抽出された特定の文様要素だけで議論するのではなく, 器形や文様のさまざまな要素の相互関係をふまえ, そこに一定の変化の方向性を見出そうとするならば, まずは一個体のなかにどのような属性が共存するのかについてのデータの蓄積が必要であろう。

図 172・173 と表 131 に各観察項目の分類基準を示した。表 132 に各個体の観察結果を示した。この結果からは, 個別的な傾向として, 第一に, 口唇部の断面形には角形(a類)が多く, 丸形(b類)や外面側に傾斜する形態のもの(c類)は少なかったことがわかる。頸部が明瞭に屈曲するものにはb類もしくはc類のみがみられる。口縁部や胴部に突瘤文だけでなくそれ以外の文様をもつもののほとんどはa類の口唇部を有していた(ただし a類の口唇部を有するものでも, そうした文様をもたないものもある)。第二に, 底部までが残っている個体は少なかったが, 底部形態では外側に張り出すb類が多かったことがわかる。個体数が少なかったが, a類の底部形態のものは, いずれも口縁部や胴部に突瘤文だけでなく他の文様もみられるものであった(ただし b類の底部形態のものでも, そうした文様を有するものが認められる)。第三に, 器形には口径≤胴径と口径>胴径の両者が認められた。頸部に屈曲を有するものは, いずれも口径>胴径の器形をなしていた。第四に, 個体数は多くないが, 頸部に屈曲をもつものは, 口唇部や底部形態, 口縁部や胴部の文様に関して, 個体間に強い共通性が認められた。

d. 土器群の出土状況

次に本土器群の出土状況を検討する。ここまで把握してきた器形や文様のバリエーションが, 空間的にどのように分布して出土しているのかを吟味していきたい。

図 117 には 8 b 層の遺構外から出土した土器の出土位置を示したが, それをもとに土器分布の小単位として 10 の区域を設定した。遺構の配置との対応関係, 遺物の出

表 130 西区 8 b 層出土壺の類型の組成

類型	個体数	%
a-1	2	25.0
a-2	0	0.0
a-3	0	0.0
a-4	2	25.0
b-1	4	50.0
b-2	0	0.0
b-3	0	0.0
b-4	0	0.0

表 131 土器の属性

器形	a	口径≤胴径
	b	口径>胴径
頸部	a	屈曲なし
	b	屈曲あり
口縁部文様	a	微隆起線文
	b	沈線もしくは縄文
	c	なし
胴部文様	a	縄文
	b	沈線・櫛描文
	c	なし
外面調整	a	ハケメ
	b	ナデ
	c	ハケメ+ナデ
	d	なし
内面調整	a	ハケメ
	b	ナデ
	c	ハケメ+ナデ
	d	なし
突瘤文	a	一条
	b	二条
	c	三条
	d	なし

土の粗密、地形（等高線の配置）などを考慮して区分をおこなったが、あくまでも各土器資料の出土状態（出土位置の近接性）を理解するために便宜的に設定したものであり、各单位の相互の等質性は担保されておらず、遺跡を形成した行動復元のための有意な単位である保証もない。

図 174 に各区域から出土した主だった土器を示した（接合・復元された個体を主に示し、破片資料については除外している）。類型区分が可能であった個体については、そのことも示してある。接合によって複数の区域にまたがって出土している個体があるが、それらについてはその度ごとに図中に含めて示した。この図から、本地

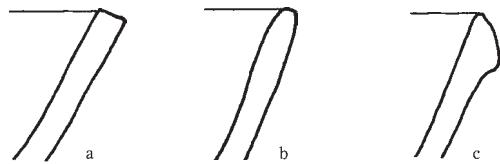


図 172 口唇部断面形態

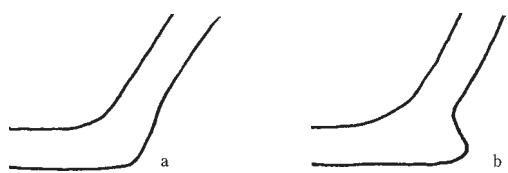


図 173 底部形態

点内のなかのさらに細かな単位でどのような土器が出土しているのかを、大まかにでも把握することができよう。

1 区からは、深鉢の a-1 類、a-2 類、a-8 類、b-1 類、b-2 類、b-8 類、b-9 類、d-8 類、壺の a-4 類、b-1 類、小型深鉢、片口などが出土している。2 区からは、深鉢の a-6 類、b-3 類、b-8 類、b-9 類、小型深鉢、注口などが出土している。3 区からは、深鉢の a-8 類、b-1 類、b-2 類、b-5 類、壺の a-1 類などが出土している。4 区からは、a-8 類、a-9 類、b-8 類、小型深鉢などが出土している。5 区からは、深鉢の b-1 類、b-2 類、b-7 類、b-8 類、壺の b-1 類、小型深鉢などが出土している。6 区からは、深鉢の a-1 類、a-8 類、b-2 類、b-8 類、b-9 類、d-8 類、壺、片口などが出土している。8 区からは、深鉢の a-8 類、b-2 類、b-5 類、d-8 類、片口などが出土している。9 区からは、深鉢の b-2 類、b-5 類、d-8 類などが出土している。10 区からは、深鉢の b-1 類、b-2 類、壺の b-1 類、鉢、注口などが出土している。

それぞれ区域ごとでの出土土器をみてみると、a 類と b 類のいずれかに偏った分布を示しているわけではないことがわかる。また、深鉢が a-8 類や b-8 類、a-9 類、b-9 類によって主に構成されている区域（4 区）もあるが、ほとんどの区域では、a-1 類・a-2 類・b-1 類・b-2 類といった、口縁部から頸部にかけて微隆起線文や縄文、沈線文がみられるものとともに、a-8 類・b-8 類・a-9 類・b-9 類や d-8 類といった、突瘤文だけや無文のものも出土している。それらとともに壺や片口、注口、小型深鉢、鉢などの器種も出土している。

以上の組み合わせをみる限りでは、特定の深鉢や壺の

表 I32 復元土器一覧

挿図	個体番号	類型	口唇部形態	底部形態	器形	頸部	口縁部文様	胴部文様	外面調整	内面調整	突瘤文
61-2	48	b-8	a	a	b	a	c	c	c	b	a
61-6	156	b-5	a	—	b	a	b	c	c	d	b
61-7	45	d-8	b	—	b	b	c	c	c	c	a
61-8	29	b-2	a	—	b	a	a	b	d	b	b
62-9	19	b-1	a	a	b	a	a	a	d	c	a
62-11	12	d-8	b	—	b	b	c	c	c	c	a
62-12	62	a-2	a	—	a	a	a	b	b	b	a
63-14	63	a-6	a	—	a	a	b	c	c	c	a
63-15	55	b-9	b	—	b	a	c	c	c	c	d
63-18	10	a-1	a	a	a	a	a	a	d	b	a
64-24	47	b-8	a	—	b	a	c	c	c	c	b
78-1	11	b-1	a	—	b	a	a	a	d	c	a
78-2	3	a-1	a	—	a	a	a	a	d	d	a
78-3	73	b-1	b	b	b	a	a	a	d	a	a
78-4	5	b-5	a	b	b	a	b	c	c	c	a
79-5	23	b-5	a	—	b	a	b	c	b	b	b
79-7	2	b-8	b	b	b	a	c	c	c	c	c
79-8	28	a-8	b	b	a	a	c	c	c	c	a
80-9	22	a-8	b	b	a	a	c	c	c	c	a
80-10	1	b-8	a	b	a	a	c	c	c	c	a
80-11	7	b-8	a	b	b	a	c	c	c	c	a
80-12	6	d-8	c	b	b	b	c	c	c	c	a
81-13	31	d-8	c	b	b	b	c	c	b	c	a
81-14	13	b-9	b	b	b	a	c	c	d	d	d
81-15	125	a-9	a	—	a	a	c	c	d	d	d
86-36	50	a-1	a	—	a	a	a	a	d	c	a
86-40	69	b-3	a	—	b	a	a	c	c	b	a
86-46	53	b-7	a	—	b	a	c	b	c	c	a
86-47	58	b-8	a	—	b	a	c	c	c	c	c
87-50	65	a-8	b	—	a	a	c	c	c	c	b
87-51	66	a-8	b	—	a	a	c	c	c	c	a
87-54	67	b-8	a	—	b	a	c	c	c	c	a
87-55	98	a-8	a	—	a	a	c	c	c	c	a
87-58	64	b-8	b	—	b	a	c	c	c	c	a
88-59	52	b-9	a	—	b	a	c	c	c	c	d

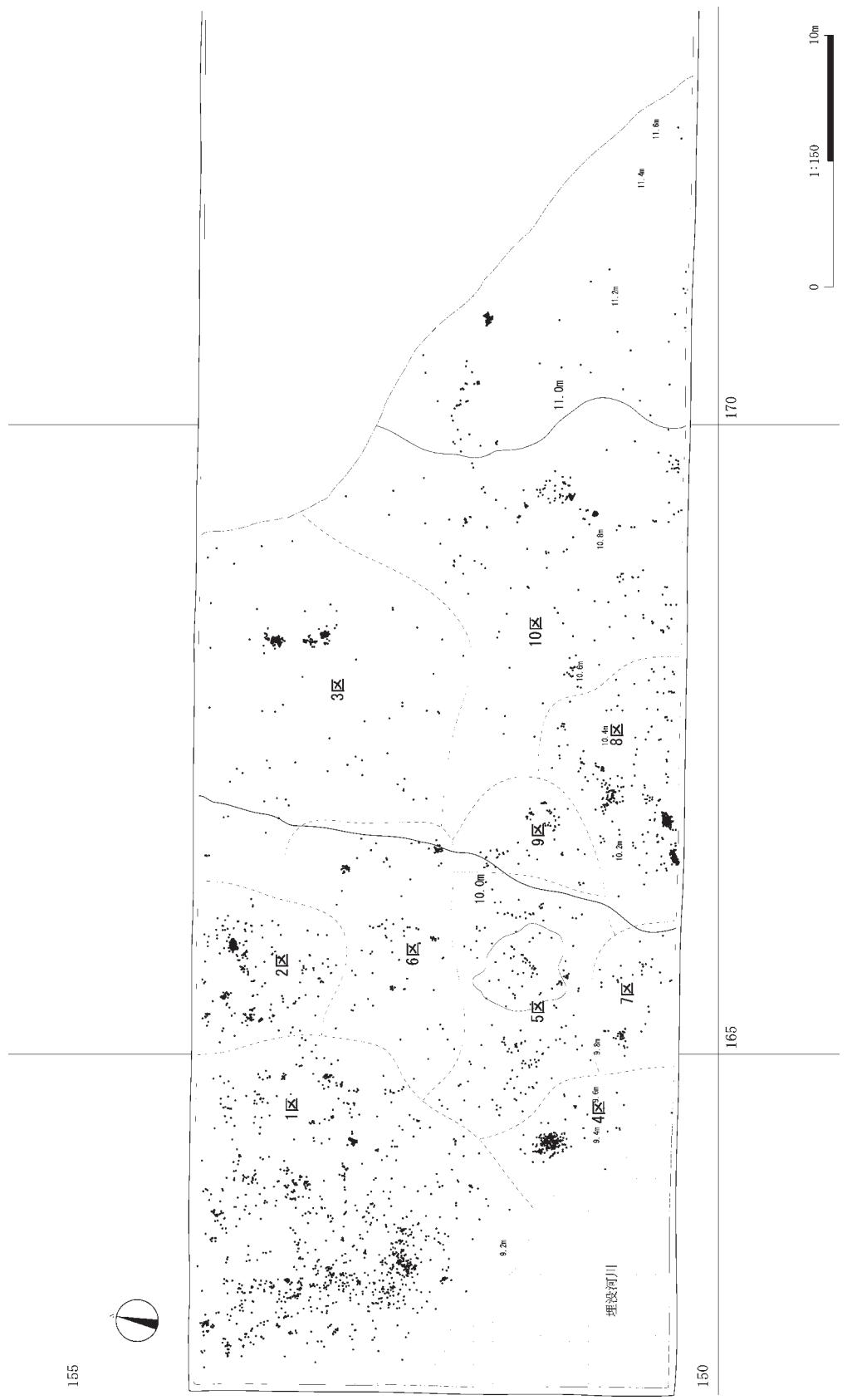
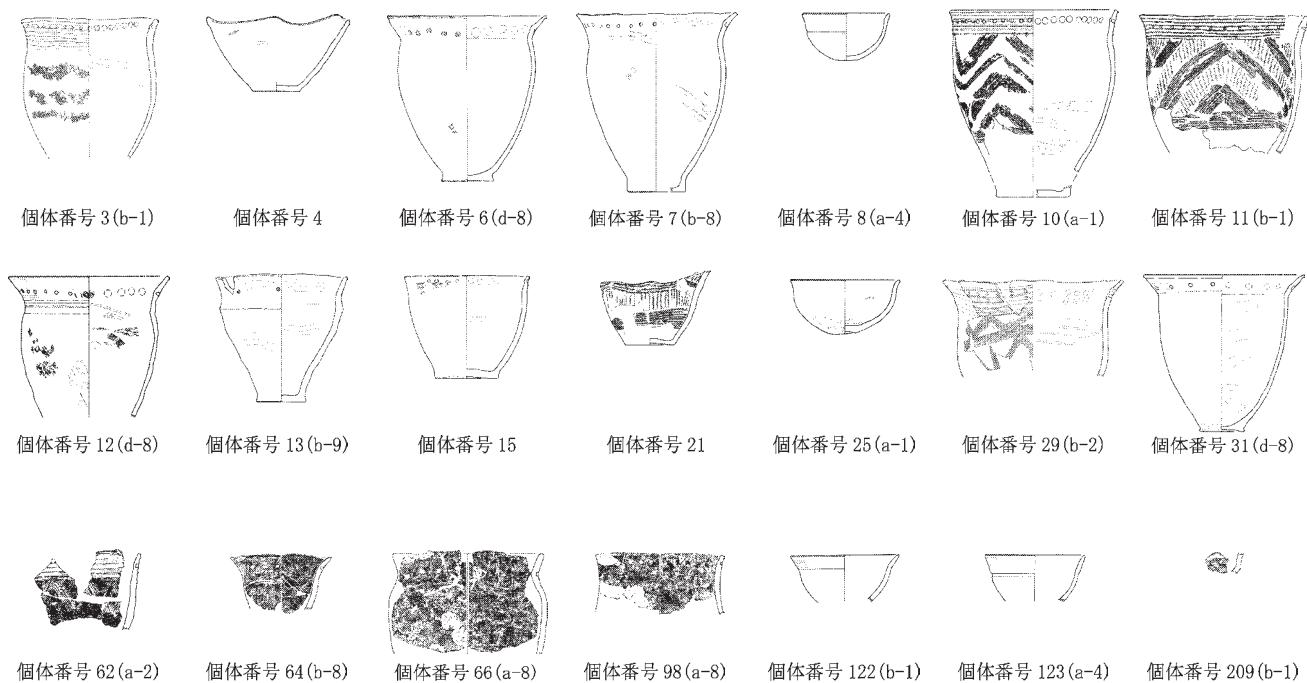
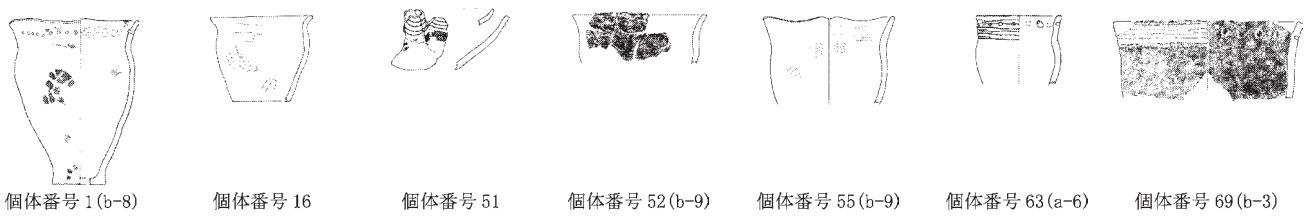


図 174 西区 8b 層出土土器の分布の区域

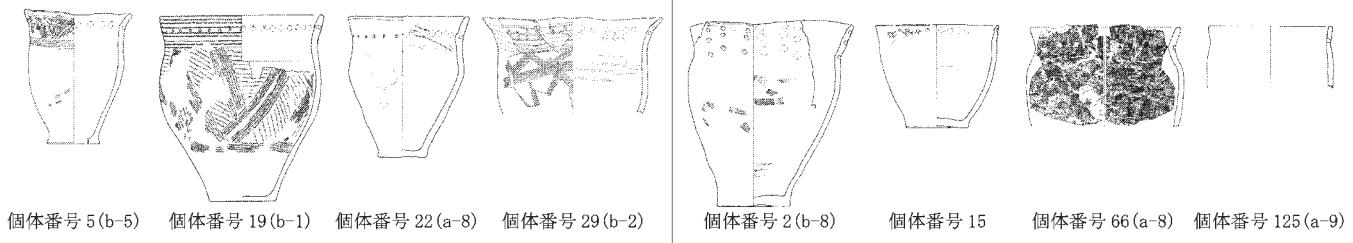
1区



2区



3区



5区



図 175 各区域から出土した土器(I)

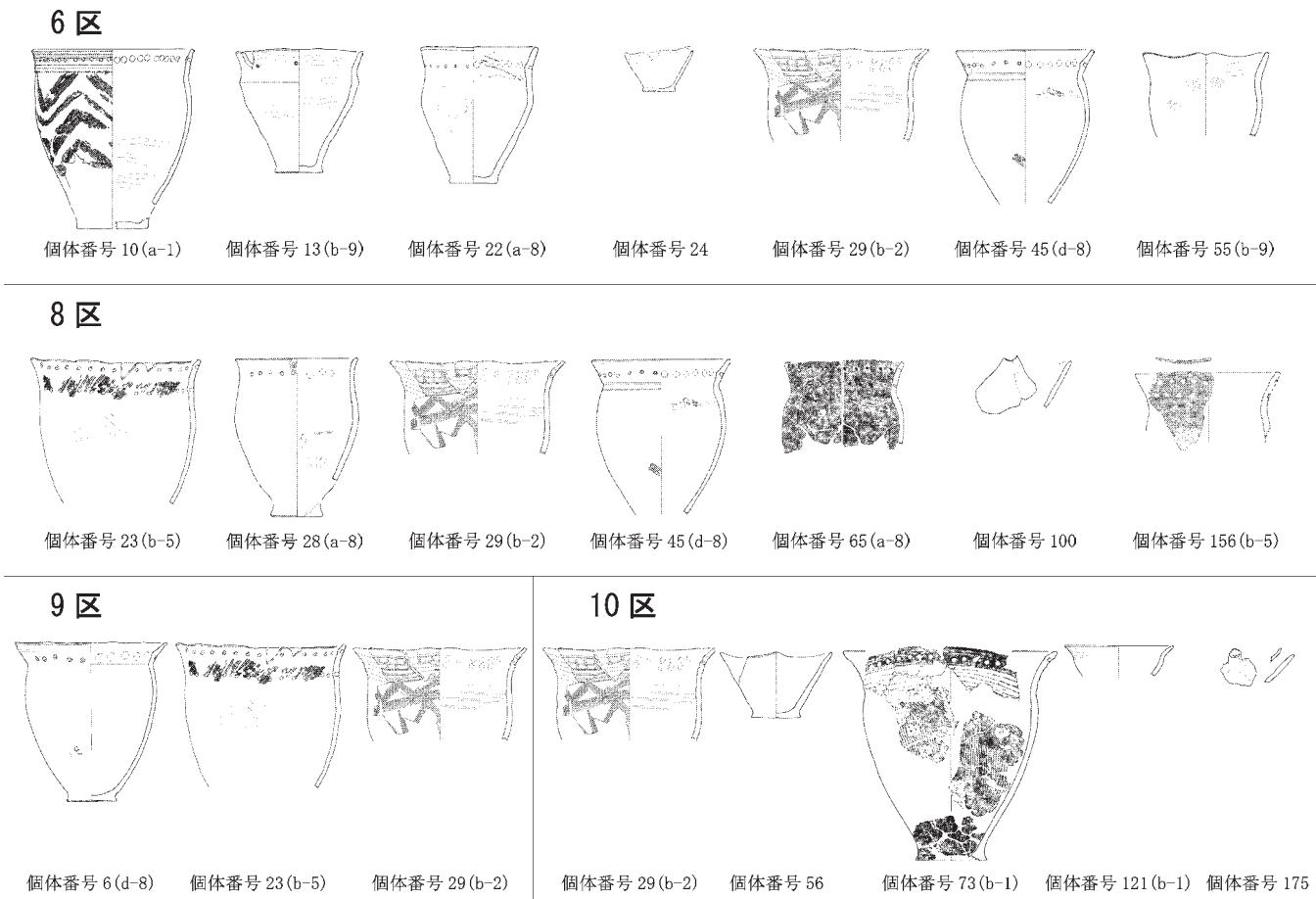


図 176 各区域から出土した土器(2)

類型あるいは器種どうしが排他的に組み合わさって出土している状況は確認できなかった。出土状況からは、特定の深鉢や壺の類型、あるいは器種の組み合わせを抽出・分離することができないといえよう。

e. 土器群の位置づけ

土坑の坑底面からの出土ではないが、覆土からの出土により共伴関係が想定しえる事例のうち、とくに編年的評価のうえで重要なのは、PIT 09 から出土した個体 156 (図 61-6) と 46 (図 61-7), PIT 26 から出土した個体 12 (図 62-11) と 62 (図 62-12), PIT 33 から出土した個体 63 (図 63-14) と 55 (図 63-15), 82 (図 63-16) である。

前二例は、口縁部に微隆起線文・胴部には櫛描文がみられる個体と、d-8 類に区分された頸部に屈曲をもつ突瘤文のみがみられる個体との組み合わせである。北大式土器に関する従来的な定義 (齊藤 1967 など) にもとづき

微隆起線文の存在を基準とすれば、「北大 I」と「北大 III」の共伴例ということになる。土坑内からは、土器が完形もしくはそれに近い状態で見つかってはおらず、破片資料の状態で出土している。そして、土坑内外から出土した破片資料の相互が頻繁に接合した関係が確認されている。土坑のサイズや形態などもふまえると、土坑内から出土した土器資料に関しては副葬品という性格を想定することは困難であり、共伴関係の認定という点では若干の問題を残している。しかし、特定の土坑とその周辺への土器の放棄活動には一定の時間的な近接性を認めることができると考えられる。結果的に、これらの共伴関係を妥当とみなす限り、上述した事例は、従来的な定義が編年の単位になると考える議論への反証となりえる。

三例目は、口縁部から頸部に突瘤文や沈線文がみられるものと無文の深鉢や小型深鉢との組み合わせである。

遺構外出土の土器資料に関しては、前述の通り、土器の器形や文様の諸特徴と出土位置との間に何らかの対応

関係を見出すことはできなかった。そのため、本土器群をひとまとめのものとして扱い、以下の議論を進めていくこととする。以下では、関連資料との比較や既存の分類・編年案との対比にもとづいて、本層出土Ⅲ群土器群の編年的位置づけを考えていくことにしたい。

深鉢に関して、本土器群では、突瘤文とともに微隆起線文や縄文などがみられるもの、突瘤文だけがみられるもの、無文のものという三者がそろって出土している点が特筆される。北大期の土器が突瘤文をもつものだけではないことは再三指摘されてきているが（鈴木 2003、大井 2004など）、こうした今日的な課題の認識のうえでも本土器群は重要な意味をもっているといえる。本土器群の深鉢の器形は、頸部から口縁部がやや外傾するものから、頸部がくびれ口縁部が外反するものまでバリエーションが認められる。しかし、少なくとも胴部から口縁部までが直上に立ち上がっていきもの、頸部と胴部の区画があるもの、頸部の長胴化が認められるものが確認できなかった点は、本土器群の位置づけを考えていくうえで注目しておきたい。

第III章で深鉢の類型として設定したもののうち、胴部から口縁部までの立ち上がりに明瞭な屈曲が認められない、a類やb類と分類した資料の文様や器形に関しては、基本的にこれまで確認してきた北大式土器の範疇・系統内で理解することが可能である。文様に関していえば、本土器群のa-1類やb-1類に認められる、口縁部から頸部にかけて施文される平行する微隆起線文と突瘤文、胴部において鋸歯状のモチーフで施文される帶縄文や微隆起線文の組み合わせは、江別市町村農場1遺跡（江別市郷土資料館編 1993）や江別市吉井の沢1遺跡出土資料（財団法人北海道埋蔵文化財センター1982）などに類例が認められる。a-2類やb-2類に認められた、胴部に櫛描文が鋸歯状のモチーフで施文されているものは、小樽市蘭島餅屋沢遺跡（小樽市教育委員会 1991）出土資料に類例が見いだせる。口縁部から頸部にかけて縄文や沈線が施文されている資料は、阿寒町シュンクシタカラ遺跡（岡崎ほか 1963）をはじめとするいくつかの遺跡から出土資料で認められるが、本土器群のb-5類に認められたような、上下を沈線文で画し、そのなかに縄文が施文されるというパターンは、これまでほとんど確認されてこなかったといえる。a-6類に認められた口縁部から頸部にかけての平行沈線文と突瘤文の組み合わせは、苫小牧市柏原18遺跡（苫小牧市埋蔵文化財調査センター1995）出土資料に類例が見出せる。a-8類やb-8類といった口縁部に突瘤文だけが認められるものは、江別市吉井の沢遺跡出土資料の同類資料で認められた器形のバリエーショ

ンに対比が可能であろう。

そうしたなかで、深鉢のd-8類として分類された、頸部に明瞭な屈曲をもつ土器資料（個体6、12、31、45など）は、これまでの既出資料のなかには類例が見出しがたく、とくに注目が必要である。それらは、出土個体数は少ないが、頸部に明瞭な屈曲をもち、胴部上位で外側へ緩やかに膨らみ、底部が外側に張り出すという器形の特徴を共有し、なおかつ一列の突瘤文だけを口縁部にもつという文様、口縁部の外面にはヨコナデがみられるという器面調整の特徴に関しても相互に共通した諸属性を有している。頸部から口唇部までの距離がそれほど離れてはおらず、北大式土器の器形のバリエーションである「頸部と胴部の区画」（榎田 2009など）をもつものとは明らかに異なっている。これまで確認してきた北大式土器の器形の変遷のなかに位置づけることは難しい（北大式土器の器形や文様の全体的概要および系統関係については、鈴木 2003、大井 2004、榎田 2009などを参照）。

東北地方における古墳時代中期から後期にかけての甕の器形は、頸部に明瞭な屈曲をもつものによって構成されている。器面調整としては、口縁部にはヨコナデが特徴的に施されている（東北地方における当該期の甕の器形の変遷については、青山 1999 や柳沼 1999、村田 2007などを参照）。本土器群のd-8類土器は、それらの特徴を部分的に有していると考えることができる。もちろん、両者には、全体的な器形（とくに底部の作り出し方や胴部のふくらみなど）や器面調整（胴部の内外面にみられるミガキやヘラケズリ）、胎土など見過ごすことのできない差異があることも確かであり、単純な対比が成立わけではない。特定の部分的な器形の特徴だけが取り込まれた背景が説明されねばならないだろう。この点については別機会に論じたい。いずれにしても、本例は今後、東北地方の同時期の甕からの形態上の影響（系統）関係を北大式土器の深鉢のなかに見出していく議論の契機となりうる可能性をもっていることを指摘しておきたい。

本地点から出土した壺に関しては、当該期の関連資料がこれまで道内ではほとんど確認されてこなかったため（八木 2010）、東北地方の事例との対比をまず考えるべきであろう。東北地方では、とくに南部の宮城県や福島県で古墳文化中期から後期にかけて、編年上の欠落がなく土器資料が集積されている。東北地方の土師器に関しては、氏家和則（1957）にはじまる編年研究の蓄積があり、近年では南部の資料に主にもとづいて柳沼賢治（1989、1999）や藤沢敦（1992）、仲田茂司（1997）、青山博樹（1999）、村田晃一（2007）、菅原祥夫（2007）らによる研究成果が提示されている。一方、東北地方北部の青森県や岩手県

では、地域・時期によって遺跡数の偏りがあり、様相の把握が充分にはなされていない時期がある。

本土器群の壺に認められた、丸底で、体部が緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁部付近が短く外傾する、赤彩や内面の黒色処理が認められるといった点は、藤沢（1992）や青山（1999）らのいう引田式から佐平林式（佐平林式併行期）にかけての時期の土器群の壺に認められる特徴である。本土器群の個体 25・8（図 83-24・25）は青山（1999）のいう「壺 A」、個体 122・121（図 83-27・28）は「壺 D」の違いに対応するであろうか。本土器群に含まれる壺の位置づけを考えるうえでは、とくに 5 世紀末から 6 世紀初頭の年代が想定されている佐平林式（佐平林式併行期）に属する土器群が注目されよう。当該期の該当資料としては、郡山市山中日照田遺跡 C 地区 11 住居址（郡山市教育委員会 1982）や郡山市南山田遺跡 3 号住居址、（財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1991），山元町合戦原遺跡 1・2 号住居址（宮城県教育委員会 1991），古川市名生館遺跡 SK 430 土坑（宮城県多賀城址調査研究所 1986）出土資料などがあげられる。

本地点出土の壺と東北地方の当該期の壺との間では、器形に類似する要素がみられる一方で、東北地方のものはミガキやヨコナデによって丁寧な器面調整がなされており、また細粒で緻密な胎土が利用されているという点も見逃すことはできない。口縁部が外傾する部分に対応する内面には稜が認められるのも通例である（認められないものもあるが）。こうした諸特徴は、本地点出土の壺には見いだせないものであり、これらの問題をどのように考えるのか、加えて東北地方の当該期の資料において認められる器種と器形のバリエーションのなかで、なぜある特定の壺だけが本地点で認められるのか、という点についても今後の議論が必要であろう。

北大式土器の器種構成として一般的にみられる深鉢、注口、片口などにもとづいて、本土器群はどのように位置づけることができるのか、最後に言及しておきたい。北大式土器の変遷に関し榎田朋広（2009）は、旧来設定されていた細別型式をふまえつつ、あらためて北大 I 式・II 式・III 式を定義し直し、北大式土器における編年単位の抽出を試みようとする議論を提示している。榎田の提示した基準に照らし合わせれば、8 b 層包含層から出土したⅢ群土器群には、北大 I 式と II 式土器が含まれていることになる。

他に鈴木信（2003）や塙本浩司（2007）も当該期の土器群に関して、異なる手続きにもとづきながら、さらに多くの細別時期を設定して編年をおこなっている。いずれにしても、それら既存の編年案の基準を参考する限り、

本土器群の深鉢にはいくつかの細別時期にまたがる資料が含まれていることになる。これらの論者が提示する北大式土器全体の変遷過程をトレースすれば、本土器群の深鉢のなかで a-1・b-1・a-2・b-2 類は相対的に古く、b-5・a-6 類は相対的に新しい編年位置づけが与えられることになる。本土器群には、鈴木（2003）や塙本（2007）が示した年代観から推定すれば、5 世紀中葉から 6 世紀初頭の年代をあてるのが妥当となる。土器の出土層準や平面位置から本土器群を複数の異なる時間的単位に分離することはできなかったが、上述のような既存の細別段階を基準として評価する限り、本土器群には一定の「時間幅」を認めなければならないことがわかる。本土器群を時間的にどのように細別するのが妥当か、今後の検討課題としたい。

f. おわりに

本節では、K 39 遺跡工学部共用実験研究棟地点西区 8 b 層から出土したⅢ群土器群を検討対象の資料体として、器種組成、深鉢や壺の類型の組成のデータを定量的に示すとともに、土器を構成する諸属性がどのように組み合わさるのかについて検討を進めてきた。そして、北大式土器の既存の編年案あるいは周辺地域の関連資料との対比にもとづきながら、本土器群の位置づけについても考察を加えてきた。

本土器群の深鉢や壺のなかには、東北地方の古墳文化後期初頭の資料に対比ができるもの、あるいは一部の要素にその影響（系統）関係を想定することが可能なものが含まれていた。とくに当該期の壺は、これまで北海道ではほとんど類例が知られていないかったものである。今後、あらためて関連資料の検討をおこなう必要があるが、北大式土器の変遷や系統関係を体系的に復元し、そこに年代的位置づけや地域間関係の具体相を読み取ろうとする際に、本土器群は興味深い問題提起をなすものといえよう。

引用文献

- 青山博樹 1999「古墳時代中～後期の土器編年—福島県中通り地方南部を中心に—」『福島考古』第 40 号、45-69 頁
氏家和典 1957「東北土師器の型式分類と編年」『歴史』第 14 輯、1-14 頁
江別市郷土資料館編 1993『町村農場 1・2 遺跡』江別市教育委員会
大井晴男 2004『アイヌ前史の研究』吉川弘文館
岡崎由夫・澤 四朗・富水慶一・藤村久和 1963「北海道阿寒町布伏内シムクシタカラ遺跡発掘報告」澤四朗編『北海道阿寒町の文化財 先史文化篇第一輯』5-44 頁、阿寒町教育委員会

- 小樽市教育委員会 1991『蘭島餅屋沢遺跡』
河野広道 1959「北海道の土器」『郷土の科学』第23号, 1-8, 35-42
頁
郡山市教育委員会 1982『郡山東部II 大善寺地区遺跡 山中日照
田遺跡』
財団法人郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1991『南山田遺跡 第
一冊』
財団法人北海道埋蔵文化財センター 1982『吉井の沢遺跡』
斎藤 傑 1967「擦文文化初頭の問題」『古代文化』第19巻第5号,
77-84頁
榎田朋広 2009「北大式土器の型式編年—統縄文／擦文変動期研究
のための基礎的検討1—」『東京大学考古学研究室研究紀要』第23
号, 39-92頁
菅原祥夫 「福島県中通り地方中部」辻秀人編『古代東北・北海道に
おけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学, 44-72頁
鈴木 信 2003「道央部における統縄文土器の編年」『ユカンボシ
C 15 遺跡(6)』財団法人北海道埋蔵文化財センター, 410-452頁
鈴木 信・豊田宏良・仙庭伸久 2007「北海道南部～中央部」辻秀
人編『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
東北学院大学, 304-339頁
田才雅彦 1983「北大式土器」『北奥古代文化』第14号, 20-29頁
塚本浩司 2007「石狩低地帯における擦文文化の成立過程につい
て」天野哲也・小野裕子編『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館,
167-189頁
苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995『苫小牧東部工業地帯の遺
跡群V—苫小牧市静川19・26遺跡・柏原18遺跡—』
仲田茂司 1997「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式
の編年」『日本考古学』第4号, 109-122頁
藤沢 敦 1992「引田式再論」『歴史』第79輯, 68-86頁
松下 宜 1963「いわゆる北大式土器についての一考察—統縄文文
化の終末と擦文文化の初源との問題—」『北海道地方史研究』第
46号, 6-12頁
宮城県教育委員会 1991『合戦原遺跡ほか』
宮城県多賀城跡調査研究所 1986『名生館遺跡VI』
村田晃一 2007「宮城県中部から南部」辻秀人編『古代東北・北海
道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学, 119-163
頁
八木光則 2010『古代蝦夷社会の成立』同成社
柳沼賢治 1989「福島県中通り地方の土師器」『福島県に於ける古代
土器の諸問題』万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委
員会
柳沼賢治 1999「福島県における5世紀土器とその前後」『東国土器
研究』第5号, 21-42頁